

自動化書庫システム (AutoLib) における
 サイズ別フリーロケーション方式と固定入庫方式について
 — 国際基督教大学図書館の運用事例報告pt. 3 —
 Free Location by size and Fixed Location of AutoLib. Case
 study pt.3 at International Christian University Library.

黒澤 公人*

抄 録

自動化書庫システム (AutoLib) には、フリーロケーション方式と固定入庫方式の2つの運用方法がある。フリーロケーション方式では、資料はコンテナの空きスペースのどこへでも入庫することが出来るが、固定入庫は最初に入庫したコンテナに戻すことや、時を経て発生する続きの資料を該当するコンテナに追加して管理していく必要がある。また、入出庫作業で発生するコンテナ内の空きスペースをどのように管理しているのか報告する。

目 次

はじめに

1. AutoLibの出納ステーションによる操作
 - 1.1 出納ステーションの操作メニュー
 - 1.2 フリーロケーション入庫資料と固定入庫資料の区分
2. 出庫
 - 2.1 出庫処理時の特殊処理
3. フリーロケーションのための入庫
 - 3.1 フリーロケーションのための空きスペース管理技術
4. 新規固定入庫
 - 4.1 固定入庫の空きスペース管理
 - 4.1.1 コンテナ満杯処理
 - 4.1.2 空きスペース予約処理
5. 追加固定入庫
6. 再入庫のための固定入庫
7. 自動化システムサーバーの管理機能
 - 7.1 固定入庫された資料をフリーロケーションに変更する場合
 - 7.2 コンテナ内容の確認
 - 7.3 画像表示機能
8. 出庫状況モニター
9. システム構成

おわりに

○ はじめに ○

本誌 25号、26号で自動化書庫について報告した。本稿では、日本ファイリング社の自動化書庫システム AutoLibの図書管理機能の特徴であるサイズ別フリーロケーション方式と、固定入庫方式（以下、フリーロケーション、固定入庫と記す）にはどのような違いがあるのか、図書の出庫、入庫にともない変化する空きスペースをどのように管理しているのか、固定入庫処理で注意すべき点などを処理画面の解説と共に説明する。

フリーロケーションは、図書を自動化書庫から出庫したのち再入庫するにあたり、どのコンテナにも入庫してよいので、一度出庫された図書は、まとめて空きコンテナに入庫することができる。

一方、固定入庫は、出庫されたコンテナに必ず戻す必要があるため、出庫された図書や雑誌を再入庫するにあたり、特定のコンテナを呼び出してから入庫する。資料の追加入庫にも、特定のコン

電子図書館サービスの新たな可能性
—欧米の動向のレビューを中心に—
New possibility of digital library service.
Focusing on review of the European-American trend.

尾城 孝一*

抄 録

去る2003年6月14日（土）日本図書館協会会館で行われた、第12回大学図書館オープンカレッジ：What's Reference 24x7!? —デジタル・レファレンス・サービスの可能性— での、尾城孝一講師の「電子図書館サービスの新たな可能性 —欧米の動向のレビューを中心に—」の講演記録である。

電子図書館サービスの
新たな可能性
—欧米の動向のレビューを中心に—

千葉大学附属図書館
尾城 孝一
ojiro@ll.chiba-u.ac.jp

2003/6/14

第12回大図研オープンカレッジ

1

大学図書館における
電子図書館化への歩み

2003/6/14

第12回大図研オープンカレッジ

2

ただいまご紹介いただきました千葉大学附属図書館の尾城と申します。どうぞよろしくお願いたします。

お話に入る前に、大図研と私のかかわりについてお話ししたいと思いますけれども。実は今から20年ぐらい前かな、名古屋大学で図書館員としての仕事を始めたんですが、大図研の愛知支部に加入しました。支部の会合にもたしか2、3度参加したんですが、その後、会費を滞りまして、いつの間にか除名されてしまったと、そういう非常に不まじめな会員なんですが、それが今日こういうオープンカレッジというこういった会にお招きいた

だきまして、本当に恐縮しているわけでありませう。

今日の私のお話ですが、「電子図書館サービスの新たな可能性」というテーマで、特に海外の大学図書館の動向と、それから日本の状況を比較しながらお話をしていきたいと思ひます。

前置きといたしまして、日本の大学図書館における電子化というか、電子図書館化への歩みについて振り返ってみたいと思ひます。

まず、図書館業務の電子化というのがあるんですが、1970年代に図書館にコンピュータが導入される。まず貸し出しとか、返却、それから受け入れ、支払い、そういったいわゆる図書館のハウ

*おじろ こういち 千葉大学附属図書館 情報サービス課長 平成16年10月18日受理

京都府図書館総合目録ネットワークと
連絡協力車による相互貸借
The union catalog network of Kyoto
Prefecture and interlibrary loan by delivery vehicle

河原茂記*

抄 録

去る2004年4月29日（木）キャンパスプラザ京都で行われた、大学図書館問題研究会京都支部主催京都ワンディセミナー（テーマ「館種を越えた図書館協力」）における河原茂記氏の発表記録である。

目 次

はじめに

1. 府立図書館のコンセプトとしての市町村支援
2. 京都府図書館総合目録ネットワーク
 - 2.1 K-Libnetについて
 - 2.2 現在の状況（平成15年度末）
 - 2.3 K-Libnetによる相互貸借
3. 連絡協力車業務
 - 3.1 連絡協力車について
 - 3.2 その歴史
 - 3.3 現在の状況
 - 3.4 搬送実績（平成14年度）

○ はじめに ○

今日お配りしていただいている資料の順番に概要をご説明したいと思います。今の府立図書館が3年前に新しく開館しまして、その時に掲げられたコンセプトの中の「市町村支援」というのが随分大きく言われました。「どこに住んでいても府立図書館の本は最寄りの図書館（室）で利用できますよ」と。それで総合目録のネットワークですね、これをK-Libnetと略称しているんですけども、連絡協力車によって相互貸借をおこなっています。

○ 1. 府立図書館のコンセプトとしての市町村支援 ○

市町村支援ですが、本の貸出だけじゃなくて、職員研修を、去年、試行的にやりました。出前研修という名前をつけていますが、府立図書館へ府内の公共図書館から皆さんに来ていただいて研修するだけではなくて、府立図書館のほうから出向いて研修をさせていただきました。平成15年度は北部の網野町で1回、それから中部の日吉町に新しく図書室ができましたので、そこで1回というふうのうち職員が2つの係で4名ずつぐらいで行きまして研修をしました。平成15年度は南部ができていけませんので、平成16年度は北部、中部、南部というふうに年に1回ずつ出前研修をする予定であります。

このほかに貸出文庫というのを府立図書館はやっています、これは千とか三百とか二百とかのおおきなロットでの貸出を教育委員会を窓口にしていただいて、読書施設や学校などに貸出をしております。これは総合目録ネットワークに入っていないんですけども、私がおります振興担当のほうでさせていただいております。

*かわはら しげき 京都府立図書館資料課 平成16年10月28日受理

地域図書館ネットワークと大学図書館 —京都学園大学図書館の場合—

University library and Library-network in Local Area : A Case of Kyoto Gakuen University Library

大 館 和 郎*

抄 録

去る2004年4月29日(木) キャンパスプラザ京都で行われた、大学図書館問題研究会京都支部主催京都ワンディセミナー(テーマ「館種を越えた図書館協力」)における発表記録を加筆修正したものである。

地域・地区・県域・市町村別に特定の地域に属する幾つかの図書館が集まって相互的な協力体制を構築する地域図書館ネットワークが各地で活動しているが、本学図書館は館種を越えた地域図書館ネットワークとして1996年の7月から亀岡市図書館情報ネットワークに参加し、さらに2001年5月から京都府図書館総合目録ネットワークに参加し、府内の公共図書館と相互貸借を行ってきた。現在までの状況を問題点も含めて報告する。

目 次

1. はじめに
 - 1.1 大学図書館の「一般公開」はどこまで進んでいるか。
 - 1.2 図書館協力と「一般公開」との関係
2. 亀岡市図書館情報ネットワークシステムと本学図書館
 - 2.1 経緯
 - 2.2 システム
 - 2.3 業務の流れ
 - 2.4 利用状況
3. 京都府図書館総合目録ネットワーク(K-Libnet)と本学図書館
 - 3.1 経緯
 - 3.2 データ登録
 - 3.3 利用状況
4. まとめ

○ 1. はじめに ○

1.1 大学図書館の「一般公開」はどこまで進んでいるか。

われわれ大学図書館の人間にとっては、大学が日常の仕事の場なので余り意識しないが、学外者にとって大学図書館は、やはり敷居が高いのでは

ないだろうか。もちろん、大学生も卒業すれば学外者になるし、教職員も退職すれば、同様である。自分の住んでいる市町村町では、もちろん公共図書館を利用するということで、大学人だけでも、ある時は、公共図書館の利用者であるというふうな立場が変わってくる。最近は、一般公開ということがわりとやかましく言われているが、まだまだ大学図書館というのは敷居が高いというイメージは強いのではないかと思う。大学図書館の設置母体である国(今年度からは国立大学法人)、地方自治体(あるいは今年度から公立大学法人)、学校法人の方針に基づいてサービス対象者の範囲を限定するという原則が強くと出過ぎると「大学図書館は閉鎖的」というイメージがなかなか覆せない。

インターネットの普及に伴い、人々が自宅においてインターネットにアクセスできる情報環境下にあることを前提とした図書館サービスが提供されるようになってきた。この点では大学図書館が公共図書館よりも一歩先行している。大学図書館

*おおだて かずお 京都学園大学図書館 平成16年10月28日受理

公共図書館との連携 —教科学習の充実のために— Collaboration between primary school and public library : for enriching subject study

小河 富代*

抄 録

去る2004年4月29日（木）キャンパスプラザ京都で行われた、大学図書館問題研究会京都支部主催京都ワンディセミナー（テーマ「館種を越えた図書館協力」）における小河富代教諭（京都市立太秦小学校）の発表記録である。

目 次

- 1. はじめに
 - 1.1 太秦の地域
 - 1.2 太秦小学校
- 2. 太秦小の図書館
 - 2.1 施設
 - 2.2 司書教諭
 - 2.3 ボランティア「絵本サークル」・「朝の読書」
- 3. 公共図書館との連携 —教科学習を充実するために—
 - 3.1 国語科を中心に（2年生）
 - 3.2 総合的な学習「みどり学習」を中心に
 - 3.3 右京図書館の行事に参加
- 4. おわりに
 - 4.1 公共図書館が身近に
 - 4.2 著者・作風を意識して
 - 4.3 本の選定の助言、本の運搬の担当を
 - 4.4 ボランティアの人の学習の場を

○ 1. はじめに ○

私は小学校の一教師で、子供に本をいかに手渡すかというようなことを、いわゆる教科学習を通して考えているひとりの人間です。大きなネットワークを使っていかに本をたくさんの子に届けようかというようなことを全く考えてもいません。なんとか近くの公共図書館の本を利用して子供の学習の援助に使うかということしか考えていない小さな人間です。

私自身は太秦小学校に勤務しまして5年目になります。やっていることは、子供の前に立って、いっしょに本を読んだりとか、勉強をいっしょにするというような仕事をしています。太秦小学校のほうに赴任して1年間は、最初は理科ばかり教える教師をしてみました。6年生を相手にやってみました。

私は、本が好きなお客から、京都市の小学校の教師で本に興味をもっているものが集まる京都市小学校図書館研究会に集っております。そこで理科を教えていても、何か本をうまく届けられないかということで、理科の授業を5クラス（196名）を持ちつつ、理科に関する本を使ったり紹介したりすることを1年間ずっとやっていました。その後、3年間担任を続け、今年、週15時間は算数ばかりの授業をする教師になりました。いわゆるT.Tという協力指導で担任といっしょに算数の授業をするんです。4年生の子供に関わっておりますので、また時間ができたら子供に本を手渡していく仕事を公共図書館の方にお世話になりながらしたいと思っています。

1.1 太秦の地域

まず太秦の地域なんですけれど、みなさんご存

*おがわ とみよ 京都市立太秦小学校教諭 平成16年11月11日受理

私と大学図書館

The Roles of University Library

池内 了*

抄 録

国立大学が法人化され、その歪みがさまざまなところに出てくる可能性がある。大学図書館もその例外ではなく、さらに電子化の流れ、外国雑誌の高騰、単行本の減少など、対処すべき問題を多く抱えている。その中で、公共財としての大学図書館をどう活性化してゆかか考えてみたい。

大学図書館は、アカデミー（教員や院生）を支える、教育への援助（主として学生）、一般市民にどう開くか、という3つの要素があり、それぞれ工夫次第で面白い活動も可能になると考える。そこで、どのような新しい活動があり得るか提案してみたい。既にやっていることとも組み合わせるイベントを企画すれば、大学図書館の新しい顔が見えてくるのではないだろうか。

目 次

- はじめに
本が好きー「本を殺すのは誰か」
コーヒーが飲めるジュンク堂
私の「大学図書館利用法」
- 大学図書館の未来
電子化の流れーメディアセンターと統合されていく可能性
雑誌類の高騰ー全学での共通化
単行本の減少ー精選して備える努力を
- 新しいサービス
大学図書館の3要素
教員向け
学生向け
市民向け
映像文化との結びつきービデオ、DVD
- 法人化のなかで
よりいっそうの市民サービスを
知的財産権のあり様の検討
紙の本の未来を考えるー「本とコンピュータ」

○ 1. はじめに ○

池内です、よろしくお願ひします。

まず自己紹介ですが、「7帝大のうち、5帝大を制覇した」と言っているのですが、京都大学を卒業してから京大の助手になり、北大の助教授、東

大の助教授と異動して、東大の東京天文台が国立天文台になった時に教授になって、そこから阪大に移り、いまの名古屋大学に移ってきたというわけです。どこも10年以上いたことがないので、名誉教授になれないという名誉(?)を担っているわけです。

本が好きー「本を殺すのは誰か」

僕は本が非常に好きです。物を書くのも好きですが、本が好きです。コンピュータの時代になって、紙の本の運命はどうなるのだろうか?ということをいろいろ考えたり、心配もしています。『季刊・本とコンピュータ』(第14号、2000年秋号アンケート「25人が語る 増えつづける本、手立ではあるか?」)にも書いたんですが、人間の頭は炭素でできている。炭素と紙は相性がいい、紙は炭素ですから。コンピュータはシリコン。シリコンは石の原料ですから、石頭なんですね。シリコンと紙は相性が悪い。石頭をいくら鍛えても炭素の紙や炭素の頭とうまく折り合えないだろうと思っているんです。

紙の本は基本的にはアナログです。既に字の場

*いけうち さとる 名古屋大学大学院理学研究科教授 平成16年8月31日受理